

TYS 少年の船

韓国体験記



第6回を迎えたTYS少年の船に、三隅町から11名の児童生徒を派遣しました。一行は、8月16日から8月21日までの5泊6日の日程で韓国を訪問、貴重な体験を、原稿用紙1枚の体験レポートとして、お届けします。

「TYS少年の船」に参加して

浅田小学校 六年 板瀬智大

ぼくは、初めて韓国という国に行きました。韓国の町を通った時、ぼくは、「アンニョンハセヨ」と声をかけてみました。しらん顔をしている人もいれば、「アンニョンハセヨ」と答えてくれる人もいました。どの国でも一緒だけど、あいさつはしてもされても気持ちのいいもの。知らない人と友達になるには、まず、あいさつから始めることが大切だと思います。

これからの、二十一世紀には、あのおそろしい戦争はなくなり、日本や韓国だけではなく、世界中の人々とも、戦争のない平和な世界にしていけたらと思っています。

友情

浅田小学校 六年 中嶋浩章

韓国の旅。蔚山文化放送スタジオで、出会った韓国の人達。いっしょに観光した友達。いろいろな思い出ができました。



ちがう国の人間なのに、人間同士として、にこやかにむかえてくれた韓国の人達に感謝しています。

ちがう面でも感謝しています。こんな機会が無ければ韓国の人達とも、もう二度と会えないかも知れない友達顔さえも見れなかっただろうと思います。ほんとうにありがたいことです。

「友情」それは、人と人の心がうちとけた時にだけにできるものです。その感触をいつまでもわすれないようにしたいです。

韓国の友達とのふれあいを通して

明倫小学校 六年 石津暢久

「アンニョンハセヨ」

ぼくの耳に、優しく聞こえてきました。その一言から、ぼくと韓国の友達とのふれあいが始まったのです。ぼくたちは始め韓国の友達とのふれあいに「大丈夫だろうか」と不安を持っていました。が、いつの間にか心が軽くなり純粋な心の色になっていきました。韓国では、日本のことを快く思っていない人がたくさんいると聞いてびびりしました。それは日本の暗い過去に責任があるので仕方がないのかもしれない。しかし韓国の人はみんなあたたかく、国が離れていても、心と心が見えない糸でつながっているようでした。

韓国の文化にふれて

明倫小学校 六年 伊藤尚子

八月十六日は韓国へと出発しました。名刺交かんの時の韓国の人々はとても積極的で、あちこちから「アンニョンハセヨ?」という声が聞こえてきました。同じアジアの国の仲間として、仲良くなりたい、という気持ちでいっぱいになります。

私は韓国の観光をしている間、韓国の事をもっともっと知りたいたいと思いました。韓国は「近くて遠い国」と言われています。



だから私達が韓国の事をよく知って「日本と最も近い国」と言われるようにしたいです。そしておたがいの国を大切にしたい、もっともっといい関係を築いていきたいと思っています。

TYS少年の船

明倫小学校 六年 中村周作

八月十六日、韓国に出発する日でした。これからどんなことが待っているんだろう、と思いました。韓国に着くなり、いきなり韓国語のあいさつが耳にとびこんできました。

ぼくは、一日も早く気軽に韓国の人にあいさつできるようになりたいと思いました。

それは、とても簡単でした。あいさつをしたら返事がかえってくる、このことから日本と韓国は、だんだん仲が良くなつて